



野生昆虫 キャンプ

24時間
の記録



2017年7月24日(月)～25日(火)

見つけて、さわって、
感じて学ぶ24時間

NPO法人

いきものいんぐ

<http://ikimonoinc.jp/>



参加野生児紹介



高田 華奈
豊浦小学校6年生



武田 心愛
堺町小学校6年生



橋本 果樹
豊浦小学校6年生



山田 紗菜
豊浦小学校6年生



田村 侑誠
本室蘭小学校5年生



千葉 舞依
豊浦小学校5年生



矢黒 小春
水元小学校5年生



金丸 綾
豊浦小学校4年生

コミュニケーションスキル

2013年の夏に初開催した野生児キャンプ。当時は1回6名×3回＝18名の参加枠がいっぱいにならず、参加者ゼロで中止になった回もありました。そんな危機的状況の1年目をなんとか乗り越え、コツコツと悪ガキたちを味方につけ、気づけば今年で開催5年目を迎えることができました。こうして、このキャンプを続けてこられたのは、参加してくれる野生児のみんながいるからです。本当にありがとう。

いきもののいんくのキャンプでは、子どもどうしの「つながりかた」について、大人が助け船を出すことはありません。初めて会った人がどんな人なのかを知る力や、初めて会った人に自分のことを知ってもらう力、いわゆる「コミュニケーションスキル」は、この先もっと広い世界に出た時に

必ず必要になります。(1人で行動するのが好きというのも素晴らしい個性だと思いますが、例えばスーパー野生児化し、100%自給自足できるとしても、他人との接触は必ず発生します。)また、その能力の高さが、その子の人生を左右する場合もあるでしょう。自然環境や野生動物について学ぶことと同じくらい大切だなあという気がします。

はたして今回はどんな24時間になるのやら。出だしの自己紹介での緊張感。最初の車移動でのぎこちない空気感。それを切りさくような、お調子者のおもしろトーク。各学習を経て、完全に打ち解けてからの爆発的な悪ガキぶり。などなど…。スタッフはいつも、そんな様子を遠目で眺めながら、心の中で笑わせてもらっています。

いきもののいんくスタッフ

NPO法人 いきもののいんく代表

加藤 康大 かとう やすひろ



カナダ・アルバータ州、ヤムナスカ山岳学校の山岳ガイド養成コース終了。帰国後、大雪山にて山岳パトロール隊に所属。その後、自然保護官補佐として環境省洞爺湖自然保護官事務所にて、支笏洞爺国立公園の管理業務に携わる。外来生物の防除や希少種の保護など野生生物業務の他、山岳地域のパトロール、地域児童の環境教育に従事。環境省を退職し、2012年1月、「いきもののいんく」設立。同年8月、NPO法人格取得。主に西胆振の小中学校にて環境教育を展開。

いきもののいんく

阿部 祥人 (あべ よしひと)

伊達生まれ伊達育ち、関内在住の伊達男で3児(みんな男…)のパパ。平日は、伊達市内4カ所にて「いきもののいんく体育教室」を担当。幼児～小学生に体育指導をおこなっています。



いきもののいんく

松沢 智子 (まつざわ さとこ)

新潟生まれ新潟育ち。東京生活8年を経て、自然保護官補佐として環境省洞爺湖自然保護官事務所での勤務を機に北海道に来ました。2016年4月より、いきもののいんくに勤務しています。



NPO法人いきもののいんくの活動とは…

NPO法人を運営していくのはなかなか大変です。そこで、個人や法人の皆様が会員となったり、企業や他法人などから助成金をいただいたりすることで、なんとか活動を継続させることができます(野生児キャンプ自体もこの活動記録の作成も、今年度は「独立行政法人環境再生保全機構 地球環境基金」様の助成金で実施しています)。また、たくさんのボランティアスタッフが児童の安全管理などを手伝ってくれたり、ほぼ全ての行事にカメラマンが同行して、子どもたちを撮影してくれたり…。本当にたくさんの方に支えていただき、ここまでやってることができました。今後とも、どうぞよろしくお願い致します。



たくさん子どもたちが着てくれている「いきもののいんくTシャツ」ですが、胸のデザインにはちゃんと意味があります。様々な動物種の中で、枠からはみ出している動物が1種類だけ。それは…?



生きるチカラを育むキャンプ

野生児キャンプスケジュール

1日目	10：00	いきものいんくの森に集合
	11：00	外来生物学習
	12：30	昼食
	13：00	森の生きもの学習
	15：00	川の生きもの学習
	19：00	夕食
	20：00	夜の生きもの学習
2日目	6：00	朝のスキー場ハイキング
	7：00	朝食
	9：00	いきものいんくの森でまとめ学習
	10：00	解散

1日目 10：00～

集合・オリエンテーション

いきものいんくには、すべての活動で共通する「3つのルール」があります。

- 一、自分が何をするか自分で決める
- 一、自分のことは自分でする
- 一、自分がしたことは自分で責任をとる

この3つのルールを徹底し、限界ギリギリまでスタッフが手を貸すことはありません。泣いてもわめいても、基本的には放っておきます。

子どもたちと接するなかでいつも感じるのは“とにかくなんでも大人に聞く”ということ。「木に登ってもいい?」、「川に飛び込んでもいい?」みたいな質問ならまだしも…、「これ、どうやるの?」、「あれ、どこにあるの?」、「これ、どこに置けばいいの?」、「おやつ食べていい?」、「トイレ行ってもいい?」…。「知らねー。いちいち聞くな。自分で考えろ」というやり取りが多発するわけですが、これは決して子どもたちが悪いわけではありません。安全を重視しすぎ、面倒なことは避け、責任逃ればかり考える大人が増えたことによる当然の結果です。

ダメな時はなぜダメなのかを伝えればいいし、痛い思い、つらい経験

をしなければわからないことが世の中にはたくさんあり、そういった経験の積み重ねが、その子の生きるチカラ、“生命力”を高めるのだと思います。周囲の状況を自分で判断し、やってもいい、できる、と思ったら挑戦してみる。ただし自分のチカラで。その結果、何か困ったことが起きた場合、どうしたら解決できるか自分で考え、自分でなんとかしてみる。

「面倒なことは嫌い」というヘナチョコな大人たちの身勝手により、子どもの成長にとって一番重要なこの行程を、絶対に断ち切ってはいけません。

この3つのルールを徹底するには、こちらにも相当な気合と覚悟が必要です。しつこくくりいに下見を繰り返し、自然環境や気象、危険な野生動植物についての勉強も怠るわけにはいきません。なにより当日は少しの油断もできません。キャンプ明けの帰宅後は、完全に魂が抜け、自宅のソファで廃人になるわけですが、こんな世の中だからこそ、誰かが腹をくくらなきゃ。子どもたちが本当に“自由”でいられる場所をつくってあげたいという気持ちで、このキャンプを実施しています。



外来生物学習

1日目 11：00～

外来種がどれだけいて、どんな問題をおこしているのかや、いろいろな生きもののつながりを調べてみたい。

もっといろんな生きものについて、外来種が在来種か調べてみたい。

外来生物の駆除

環境省で動物関係の業務を担当していた僕が、一番たくさんの時間をかけた仕事が、外来生物の駆除でした。なかでも当時、特に時間を費やしたのは、洞爺湖に生息するウチダザリガニ（約100年前に食糧難対策として北米から日本に持ち込まれた外来生物）の駆除で、多い日には1日で1000匹、1年間で10万匹も殺しました。毎日毎日、ザリガニを取っては殺し、取っては殺し…。誰かがやらなきゃいけないとわかってはいても、やっぱりとてもつらい仕事でした。

僕たちの身近には、他にも駆除の対象となっている外来生物がたくさんいます。そのひとつが、今回取り上げたアライグマです。ただ「かわいいから」という理由だけで、ペットにするために北アメリカから連れてこられました。かわいらしい見た目に反して、とても気の荒い動物であることは調べもせずに…。飼うことが困難になった人たちはアライグマを野外に捨て、捨てられたアライグマが繁殖を繰り返し、やがて定着しました。そして今では、「生態系を破壊し、畑を荒らす迷惑な動物」として、北海道だけでも年間約1万頭が殺されています。犬くらいのサイズの動物を、しかも自分と同じように、身体を切れば赤い血が流れ、触れれば体温を感じられる哺乳類を、自分でつかまえ、自分の手で息の根を止める。何度経験しても“慣れる”ことはありません。毎回とても悲しくて、暗い気持ちになります。こういった経験が、いきものいんくを設立するきっかけとなりました。

「外来生物ってなに?」、「どうして殺さなきゃいけないの?」、「殺す以外に方法はないの?」、「今、僕たちにできることはなに?」。もっと広い視野で自然や野生動物について考えてみよう。地球にとって“身勝手な迷惑な動物”って…、いったい誰?



森の生きもの学習

1日目 13:00~



へびにさわれた!!!



どんな動物が
どんなものを食べているか
調べてみたい。



セミが成虫になるすがたを
見れてよかった!



へびをいまだで
キモイと思っていたけど、
めっちゃかわかった。

森で見つけた生きものが
なに類かや、なにに
食べられているのかが
わかっておもしろい。

生きもののすみかが
どうなっているのか、
もっと調べたい。



森の生きもの

「緑を大切に」と気軽に言いますが、どうして大切にしなければいけないのか、森林がどんなにたからきをしているのか、それが僕たち人間とどう関わっているのかを答えられる人は多くない気がします。二酸化炭素を吸収し、酸素を作り出してくれるという基本的なはたらき以外にも、様々な動物の食料や住み家を与えてくれたり、草や木の根が地面をがっちり押さえてくれることで、土砂崩れを防ぐ「自然の堤防」となってくれたり、木の葉が日陰を作ること、川や湖の水温上昇を抑えてくれたり…。人間の言語などでは、すべてを説明することができないくらい、本当に大切な役割を、たくさん果たしています。

そして森もまた、他の生きものを育むだけでなく、たくさんの生きものに支えられています。例えば、キノコ。森を考えると、キノコはとても重要な生きものです(菌類も生物)。木とキノコが栄養を交換し、助け合って生きる「共生」、倒木にキノコが取り付いて、土に返す「分解」、そして生きている木をキノコが殺し、森に適度なすき間を作ってくれる「間引き」など…。森のお手入れをしているキノコは「森のコーディネーター」と呼ばれます。こういった深い「つながり」を人間の手で作出すことは不可能だし、一度壊してしまったら、絶対に元に戻すことはできません。

「環境教育が仕事です」と言うと、「自然を守っているんですね。素晴らしいですね。」なんて言われますが、きっと自然環境や野生生物は、もっともバカな動物である人間なんかに守ってもらいたいと思っていけないだろうし、そもそも、人間みたいなヘナチョコな生きものが「自然」という偉大すぎるものを守れるわけはないと思っています。だから僕は、「人間がどれほどバカなのか」、それを理解したうえで、「もっと控えめに、謙虚に生きるべきではないのか」ということを子どもたちに伝えるのが、本当の環境教育だと考えています。

川の生きもの学習

1日目 15:00~



魚をとったり、
ふれ合えて
たのしかった！



川に入ったり、
とびこんだりして、
おもしろかった！

魚類や水生昆虫から学ぶ 川のはたらき

ウェットスーツにシュノーケル、ライフジャケットのフル装備、タモ網を手にドボンと川に潜り、そこに生きる魚やエビやカニ、水生昆虫などを自分の目で直接観察し、時には手にとって触れることで、「周囲の木々が葉っぱを川に落とし、その葉を水生昆虫が食べ、水生昆虫を小さな魚が食べ、小さな魚を大きな魚が食べ、死んだ魚の死がいや甲殻類やキノコやワシや陸上の昆虫が食べ、食べ残りを微生物が分解し、それが土の栄養となり、川の周囲に植物を育て…」という、川が育む命のつながりや循環を学びます。たくさんの魚に囲まれながら泳ぐことで、その大切なつながりを強く感じることができます。これはプールや水族館では体験できません。川は身近で偉大な先生です。こんな素晴らしい先生に学ばない手はありません。

危ないから川に入ってはいけない？それは学校のルール。いきものいんくのルールは違う。川の中がどうなっているのか、川の中で生きものたちがどうやって生きているのかなんて、自分の目で見てみなきゃわからないし、川のどういう場所がどんなふうに危ないのか、どれくらいの流れの強さなら歩いたり泳いだりできるのかだって、自分で体感してみなきゃわからない。自然災害が発生するたびに、「人間は絶対に自然の力にはかなわないのです。かなわないことを知る必要があるのです。日常の防災教育が大切なのです」と、えらそうな顔で、知ったような口をきく大人がテレビに登場するわけですが、「危ないからダメ！」という教え、というか「守りの姿勢」との矛盾を感じずにはいられません。

生きものどうのつながりを育み、水や空気や食べ物など、僕たちが生きるために必要なたくさんの物を作り出してくれている川。ドボンと飛び込んで、その偉大さを体感し、学ばないことのほうが川に失礼な気がします。「子どもだけで川に行ったらしかれた」という子どもたちを、僕は胸をはってほめてあげたいと思います。





生きものどうしの
つながりを守るために、
カブトムシを外へ捨てては
いけないことがわかった。

夜の生きもの学習

1日目 20:00～



ニホンザリガニ

ニホンザリガニは、この地球上で北海道と東北の一部にしか生息していない貴重なザリガニですが、森林の伐採や河川改修、道路工事などによってどんどん数が減り、現在では絶滅危惧種に指定されています。「昔はそこらじゅうにいた」というオッサンたちの声も聞かれますが、現在では生息場所が限られてしまっています。また、生息環境に敏感であるため、「環境指標生物」として、各工事の際の環境調査の対象となることも多いのですが、「工事現場付近にニホンザリガニが生息しています」という調査結果が、必ずしも工事の実施を食い止められるわけではありません。お金が大好きな日本人は、そんなことを無視し、お金もうけのために自然破壊を続けてきました。

どうしてもその山の木を切らなきゃいけないの？絶対にその川を真っ直ぐにしなきゃいけないの？そこに道路を作ったり、新幹線を走らせないと人間は死ぬの？僕たち人間が、必要最低限の豊かさ以上を求めることで、生活環境を破壊され、死んでいく野生動物がたくさんいるということを忘れてはいけません。



カブトムシ・クワガタ

北海道で野生化し、すっかり定着してしまったカブトムシ。これも人間がペットとして無理やり本州から連れてきた外来種です。北海道では最近やっと、「カブトムシを自然の中に放してはいけない」という条例ができましたが、ちょっと遅すぎた気がします。胆振でもここ数年、確実に増えています。基本的に、いきものいんく学習で持ち帰ることがOKなのは外来種のみ。持ち帰って死ぬまで飼うか（ウチダザリガニやアライグマなどの特定外来生物は飼えないので注意）、かわいそうですが殺してしまいます。

ペットにするため、食糧にするため、毛皮をとるため、釣りを楽しむため、毒ヘビを退治させるため、医療の実験に使うため…様々な理由で、気軽に他の生きものをあちこちへ移動させ、必要がなくなれば殺す。こんなことを繰り返している動物が、僕たち人間なのです。



テント泊と宿舎



自分たちでテントをたてるのは
初めてだったけど、
完成してすごく達成感を感じた。



オオヤミート様より、
おいしいお肉を
ご提供いただきました。



女子会や
おやつ交換が
楽しかった！

朝の活動とまとめ学習

2日目 ① 6:00～



『まとめ学習 ～人間って特別な生きもののなの?～』

眠い目をこすりながらのまとめ学習。外来生物問題やロードキル（野生動物の交通事故）のほか、バードストライク（鳥類が建築物に衝突する事故）や野生動物へのエサやりなど、人間と野生動物のあいだに起きる様々な問題について学ぶわけですが、ポイントは“地球で一番バカな生物は誰か”に尽きます。何十億年という想像もつかないくらい永い永い時間をかけて育まれてきたつながりによって生かされているということ、他の生物がないと自分たちも生きていけないということを見事なまでに忘れ去り、「立派な家に住んで、カッコいい車に乗って、おしゃれな服を着て、美味しいものを食べて、豊かに楽しく暮らしたい」と、恥ずかしいほどに欲望をまる出しにして、その欲のために他の生物を絶滅させて続けているのが僕たち人間です。発見されているだけで約800万種類、未発見のものを考えると、おそらく2000万～3000万種類、いやもっといるかも、と言われる生物種のなかで、こんなに身勝手にバカな生物は僕たち人間1種類だけです。

学校授業や講演などで、「地球の歴史を人間の一年に置き換えてみる」ということをしています。地球が誕生した46億年前を1月1日とすると、最初に原始生命が誕生したのは2月25日（39億年前。深海で細菌みたいなやつが生まれたと考えられている）、植物の先祖となる光合成をおこなうバクテリアが生まれたのが5月31日（27億年前）、魚類の誕生は11月20日（6億年前）、魚類から分化し両生類が現れたのは11月29日（4億年前）、12月3日（3億9千万年前）に両生類から分化した爬虫類が出現し、恐竜が地球を支配していたのが12月13日～12月25日（2億5千万年前～1億5千万年前）。そして12月27日（5千万年前）に、やっと僕たち哺乳類の先祖であるネズミみたいな生きものが出現しています。さらに、人間の先祖である猿（ヒトとサルの間みたいなやつ）が出現したのは12月31日の10時40分くらい（700万年前）。直立二足歩行を始めたのは12月31日の15時39分（440万年前）。アフリカで今の人類とほぼ同じ、現生人類が誕生したのは20万年前、一年に置き換えると12月31日の23時37分です。こうしてみると、この地球で人間がいかに新入り動物なのかがよくわかります。そしてその新入りが、まるで自分たちが地球で一番かしくてエライ生物であるかのような顔をして、もっともっと豊かな暮らしを手に入れるために、他のたくさんの生物を絶滅させています。植物も魚も昆虫も…

人間なんかよりはるかに長い歴史を積み重ねてきた大先輩たちを殺しまくっているわけです。人間がどれくらいの数の生きものを滅ぼしているか、正確に知ることは難しいのですが、一説では年間に4万種類、13分に1種を滅ぼしているとも言われています。

僕はテレビを視ません。“生きものどうしのつながり”なんてこれっぽっちも考えることのない、バカな芸能人どうしがくっついた、離れたというくだらない恋愛ニュースや、バカな芸能人がバカな金持ちの家に上がり込み、高価な車や家具や宝石を見て「すごいですねー！うらやましー！」って…。あー、ほんとにくだらない。テロや戦争のニュースなどにおいても、「人と人が殺し合うのはよくない。戦争はいけない」と口をそろえて言いますが、爆撃によって焼かれるたくさんの植物、すみかを奪われる動物について言及する人は誰もいません。そんなところにも強い違和感を覚えるし、挙げ句の果てには莫大なお金を使って、火星だの木星の衛星だのに移住する研究を進めたりしています。この短期間で好き勝手に地球をぶっ壊し、住みにくになったら他の星へ？他の星もぶっ壊したら、また別な星へ逃げるの？そんなくだらない研究に使う脳みそと時間とお金があるのなら、他の生物になるべく迷惑をかけずに生きていく方法や壊した自然環境を少しでも回復させる方法を考えるべきだと思うし、最後は人間がこの地球でおとなしく絶滅する道を選ぶべきだと思います。

会議や講演などでこんな過激な発言をすると、「めっちゃくちゃマイナス思考ですねー」、「そんなふうに卑屈に生きるの嫌だなー」、「もっとリラックスして考えませんか？」などと意見してくるバカもいますが、そいつの顔には「お金大好き!」、「毎日おもしろおかしく、気楽に生きていけたらいいんです!」と書いてあるのが見えるので、そんなやつはいつも完全無視するようにしています。

僕たち人間も生物です。生きて子孫を残すのがつとめだと思うし、人と人が殺し合うことももちろんよくないことです。豊かになろうとすることが悪いと言っているわけでもありません。でも人間は、もっと身近な自然環境や野生動物に配慮する心もち、もっと謙虚に生きるべきです。そんなことをほんの少しでもいいから、これからの未来を担う子どもたちにも伝えられたらいいなと思っています。



生きものどうしのつながりを守るためには、外国から生きものをもちこまない!



生きものどうしはちゃんとつながっているから、人間は生きもののことを考えて生活しないといけないと思った。

人間のみがってでいろいろな動物を殺してしまったり、人間はなんのやくにもたたないことがわかった。



キャンプで出会った いきもの図鑑

アライグマ

性格が荒く、人間にはほとんどなつきません。畑の野菜や果物から、もともとこの地域に暮らしている在来の動物（カエルやサンショウウオ、昆虫、そしてニホンザリガニなどの希少種まで…）、とにかくなんでも食べます。しっぽのシマ模様が特徴。特定外来生物に指定されていて、生きたままどこかに運んだり、家で飼うことはできないので、ご注意ください。



エゾゼミとミンミンゼミ

今年はゼミが豊作でした。背中のマクドナルドマークが目印の「エゾゼミ」と、緑と黒の模様が特徴的な「ミンミンゼミ」が森のあちこちに。幼虫が殻をやぶって羽化する瞬間を見ることができたラッキーな子どもが多かったです。ゼミと言えば、「短い命、はかない命」と思われがちですが、実はめっちゃ長生きです（種類によりますが、幼虫期を土の中で3～7年過ごします。こんな長生きな昆虫はなかなかいません）。ちなみに、カメムシの仲間です。



ニホンカナヘビ

みんなに「カナチョロ」と呼ばれているやつ。手に取る機会はあまりないかもしれませんが、けっこう普通にいます。名前には「ヘビ」とついているけどトカゲです。すばしっこいですが、コツを覚えると意外と簡単につかまえます。つかまえて、顔を近づけてじっくり観察してみると、口元のウロコやガサガサしたしっぽの感じが、小さい恐竜みたいでシビれます。生きた恐竜見たことないけど。



ヒガシニホントカゲ

メスや幼体は、しっぽがメタリックブルーで本当にきれいです。今年はあまり見ることができなかったなあ…。デカくてピカピカなので、つかまえた時はテンションあがるけど、じっくり観察してみるとニホンカナヘビのほうがもっとテンションあがるかな。小さい恐竜みたいだから。生きた恐竜見たことないけど。ちなみに、ニホンカナヘビとヒガシニホントカゲのほか、北海道にはもう1種類、サロベツ原野のみに生息する「コモチカナヘビ」というトカゲがいます。爬虫類なのに卵じゃなく赤ちゃんを産む珍しいやつです。いつかつかまえて、ほったたでスリスリしてみたいと思います。



ニホンザリガニ

日本に生息するザリガニは全部で3種ですが、そのうち在来のザリガニは「ニホンザリガニ」のみで、他の2種（真っ赤な体の「アメリカザリガニ」と洞爺湖でも問題になっている「ウチダザリガニ」）は外来種です。ニホンザリガニは、大きいものでも体長5～6cmほどしかなく、この世のものとは思えないかわいさ。冷たくてきれいな水の中で、腐った落ち葉やミミズなどを食べながらひっそりと暮らしています。バカな人間が、これ以上ニホンザリガニの住める場所をぶっ壊さないことを祈ります。



ミヤマクワガタ

北海道のクワガタではノコギリと並ぶ2大勢力のミヤマクワガタ。基本的にクワガタは夜行性ですが、ミヤマクワガタは日中も活動しているので、夜じゃなくても発見することができます。今年はハルニレという木で樹液を吸うミヤマクワガタとアオカナブンがたっくさん見られました。僕は小学生の頃、ミヤマ派かノコギリ派かで、友達と大喧嘩しました。（ちなみに絶対ノコギリ派。え？どうでもいいですか？）



ノコギリクワガタ

子どもたちに大人気のノコギリクワガタ。大アゴ（ハサミの部分）がギューンとカーブしたオスの個体は「スイギュウ」と呼ばれ、めっちゃくちゃカッコよくて人気がありますが、今年はまったく出会えませんでした…。ちなみに去年もメスばかりでした。おとしは豊作。きっと人間なんかにはわからない、自然界の「周期」みたいなものがあるのだと思います。来年こそは…！



カブトムシ

同じコウチュウ目でも、クワガタはクワガタムシ科。カブトムシはコガネムシ科。ペットとして本州から持ち込まれた個体のほか、堆肥などに混ざって運ばれた個体もいるということが最近わかりました。残念ながら北海道の自然の中にはいけない昆虫です。カッコいいんだけどね。飼うなら最後まで責任をもって。「入れない、捨てない、拡げない」外来生物被害予防三原則も忘れないでね。ちなみにこの夏、ハルニレで食事中だったカブトムシのオスに、思いつきオシッコをかけられました…。



さいごに

「最近の子どもは外で遊ばないからダメだ」とか、「家でゲームばかりしてるから運動ができないんだ」とか、えらそうな顔で、「昔はちがった」と言う大人が、僕は本当に嫌いです。

ゲームやパソコンやスマホを作ったのは子どもたちではありません。物心ついた時に、こういった機器が身近にあれば、興味を示すのは当たり前だし、使ってみて楽しいと思うのも当たり前。子どもが使って楽しいと感じるよう、念入りに試行錯誤されたうえで製作、販売されているのですから。さらには、「子どもだけで川に行っちゃいけない」、「湖で泳いではいけません」、「木に登っちゃいけない」、「公園でボール遊びをしてはいけません」などというくだらないルールをどんどんこしらえ、子どもたちをヤンチャな外遊びから遠ざけているのは、僕たち大人です。現代の大人が力を注ぐべきところは、「子どもが悪いことをしない、問題をおこさない環境をつくること」ではなく、「子どもが悪いことをした時の対応力を身につけること」ではないでしょうか。

僕は、ゲームやインターネットからは学べない大切な何かが、外遊びにはたくさんあると思っています。運動能力の向上という以外にも、心の面で子どもたちに大きく影響する何かが。でも、それがなんなのかと問われると、よく

わからないというのが正直なところ。科学的な答えがあるわけでもありません（あるのかも知れないけど、別に知らなくてもいいし、知ろうとするつもりもない）。よくわからないけど、本当に楽しそうに川で泳いだり、全身を使って木に登ったり、真剣な表情でトカゲやヘビを追いかけてたり、それを捕獲して顔にくっつけたり、自分で立てたテントの中で、仲間たちと夜中まで騒いだり…。フルパワーで24時間、動き続ける子どもたちの姿を見るたびに、間違いなく、そこに大切な何かがあるのだと確信します。

「昔はちがった」などとえらそうな顔をして、自己満足にひたる暇があるのなら、子どもたちのために、いきものいんくが少しでも長く活動できるよう、日々コツコツと一生懸命働いて、こんなふう子どもたちが思いっきり遊んで学べる時間と空間を提供し、人間の生き方について一緒に考え、目の前の子どもたちと全力で向き合っていきたい。それがこれまでたくさんの動物を殺してきた僕の、いきものいんくの役目だと思っています。

今後とも、皆様のご理解とご協力をお願いするとともに、このキャンプにお子様を参加させてくださったことに、心から感謝致します。

NPO法人 いきものいんく代表 加藤 康大

この活動は、独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて実施しています。





NPO法人 いきものいんく

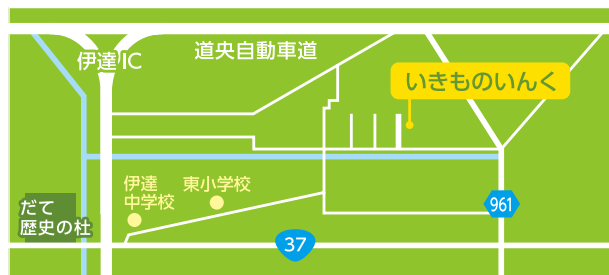
〒052-0005 北海道伊達市清住町47-1

TEL/FAX 0142-82-7757

URL www.ikimonoinc.jp / MAIL info@ikimonoinc.jp

 Facebookにて「いきものいんく」で検索してください。

 公式LINE @sna9114c



【平成 29 年 12 月発行】

発行：NPO 法人いきものいんく

撮影：クスミエリカ

デザイン：ロケットデザイン菊池信悟